

2009年2月14日シンポジウム挨拶

本日は 高知大学大学院黒潮圏総合科学専攻主催のシンポジウム：「温暖化への適応／持続可能な世界を目指して」にご出席いただき、ありがとうございます。

専攻長の奥田一雄でございます。
開会に先立ち、ひとことご挨拶を申し上げます。

黒潮圏総合科学専攻というと、みなさんは黒潮を研究しているように思われるかも知れません。しかし、私たちは黒潮そのものではなく、黒潮圏科学という新しい学問概念を打ち出し、自然と人間の共生を目指す研究を進めています。

本専攻がなぜこのようなタイトルのシンポジウムをしているのか、その理由の一端を知っていただきたく、黒潮圏科学について少しご説明いたします。

ご存じの通り、黒潮はフィリピンの東岸沖を起点として台湾、南西諸島、そして九州沖や土佐沖を経て房総半島沖まで流れる大海流です。それゆえ、黒潮は周辺地域の気象や、生物の分布、人間の生活などに大きな影響をもたらしています。黒潮の圏域として、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどの熱帯諸国、台湾、中国、本邦などの亜熱帯から温帯までの諸国が含まれています。

一方、これらの国々には当然ながら多くの人間が住み、それぞれ様々な人間生活と活動が営まれています。そのため、諸国間で文化や経済面での交流が進むだけではなく、自然破壊や公害、食料不足、疫病などの問題も国境を越えて発生し、拡大してきます。このように、黒潮の圏域は、そこにある自然とそこに住む人間の活動および諸問題等を含んだ全体を指すということになります。

黒潮圏域は黒潮で結びついている運命共同体です。そこには、様々な環境や多様な生物と人間などの地球を構成しているすべての要素が存在しています。そこではまた、地球規模の環境問題、食糧問題、人口問題なども象徴的に出現してきます。これらは1つの地域や国の問題を越え、世界的に取り組んで解決しなければならない大きな課題です。

このことは同時に、黒潮圏域を地球全体のモデルとして研究することで、地球規模の諸問題のありかを明らかにし、ひいては解決への道筋を導き出せることを示しています。このような見地から、人類が自然と共生し、持続的に生存できる社会のありかたと方向を科学的に研究する学問が必要であり、私たちはこの学問を黒潮圏科学と呼んでいます。

黒潮圏科学は黒潮圏域の地域の諸問題に必ずしも直接対処するわけではありません。言い換えれば、その場の対症療法的、モグラたたきの対応に終始する研究とは違います。黒潮圏科学では、たとえば、一見別々に起こる諸問題から、どのような人間活動が地球の環境や生態系を攪乱しているのかという根本的な因果関係を明らかにし、人間活動の方向性を転換させることを考えます。また、現在行っているまたはこれから始めようとする人間活動が自然界の正常な物質循環に及ぼす影響を評価し、それが悪い影響であればどのような予防策を採ればよいかを考えます。

黒潮圏科学を実現するには、問題を俯瞰して把握し、専門分野を越えて分析し、協働して解決の道を探ることが必須です。そのため、黒潮圏科学は細分化した従来型の学問ではなく、文系と理系が融合した新しい学問分野として創出されたのです。

さて、今回「温暖化への適応／持続可能な世界を目指して」というタイトルでシンポジウムを企画しました理由の1つは、来年度から黒潮圏科学専攻が進める研究プロジェクトのテーマが「黒潮圏科学に基づく温暖化への適応」というものだからです。

本シンポジウムには、幸運にも世界的に著名なお二人の研究者、地球物理学者の赤祖父俊一先生と、食料経済学者の大賀圭治先生をお招きすることができました。大変ありがたく、まことに感謝申し上げます。

赤祖父俊一先生には、午前中の第1部では、オーロラの美しさとロマンについて熱く語っていただきました。先生はオーロラに魅せられて20歳代にアラスカへ渡り、その後50年もの間、北極圏の科学に携われました。この間、アラスカ大学フェアバンクス校の地球物理学研究所長を務められ、また、日米コモン・アジェンダに基づく国際北極圏研究センター（IARC）を設立され、同センター所長を歴任されました。温暖化には自然変動のファクターが大きいことを科学的に示してこられています。

大賀圭治先生は、国際農林水産業研究センター部長、東京大学大学院農学生命科学研究科教授を歴任され、現在日本大学生物資源科学部教授でございます。大賀先生がアメリカワシントンDCの国際食糧政策研究所にお務めになられていた時に、「大賀モデル」と呼ばれる国際食料政策シミュレーションモデルを開発されたことで世界的に有名です。「大賀モデル」により、日本およびアジア各国を含む食料の輸入国の立場から、現実的な食料の将来予測が可能となり、これが今後の食料・農業政策立案の重要な基盤になっていると伺っております。

後半は本学の2名の教員により、沿岸域および陸域における温暖化の影響に関する報告と、最後に総合討論というスケジュールになっております。

皆さま方には、どうか、このシンポジウムを通して温暖化とは何か、持続的社会とは何かなどについて、私たちと一緒に考えていただければ幸いです。

以上